坂本、瀬谷支隊の台児庄撤退の経緯
――１９３８年４月

姜　　克　實

はじめに

中華民国政府側による「台児庄大捷」の「拡大宣伝」は、当時の宣伝部門の担当責任者郭沫若（1892-1978、国民党軍事委員会政治部第三庁長）の記録からも分るように、本格的な戦闘がまだ終了する前の1938年4月7日払暁から始まり、4月8日、共産党系唯一の合法紙《新華日報》（武漢、1938年1月創刊）は「中央通訊社」（国民党中央の配信機関）よりの配信を受けいち早く報道した。「我軍は台児庄において空前の勝利を得、敵一万余を殲滅し、夥しい数の小銃、軽重機関銃、歩兵砲、大砲、装甲車を鹵獲した」、という[1]。続く各種非正式の戦果報道が飛び交う中、4月11日、戦果に関する公式発表は、郭沫若の上司、軍事委員会政治部長陳誠将軍（1897-1965）の名義で行われた。いわく「戦場における敵の遺棄死体は五、六千名、傷病者は千五六百名、捕虜千名あまり、火砲七十門、戦車四十台、装甲車七十台、トラック百台あまりを鹵獲した」と、という[2]。

この大勝利は、また当時戦場入りしたオランダ人映画監督ジョリ・イベンス（Joris Ivens 1898-1989）、オーストリア出身の戦地カメラマン、ロバート・キャパ（Robert Capa 1913-1954）の戦地報道、写真、記録映画など[3]により海外のメディアにも広がり、「アジアにおけるワーテルローの戦い」（『明星晩報』）“世界史上の重要決戦の一”（『ワシントンポスト』）[4]と称されるようになり、戦地の様子も5月23日、アメリカの雑誌『ライフ』において、キャパに送られた大量の現地写真とともに報道された。曰く「歴史の転換点を飾る小さい村名には、ワーテルロー、ゲティスバーグ，ヴェルダンなどいろいろあるが、今、新しい名前が増えることになった、台児庄である。この勝利によって台児庄は中国でもっとも有名な村になろう」と[5]。のち、宣伝された戦果は何応欽（1890-1987）の『八年抗戦之経過』（敵三万余を殲滅）や[6]、李宗仁（1890-1969）の回顧録（敵死傷二万人以上）にも援用され、大捷の神話は次第に両岸の中国で定着した。この戦いで日本軍は台児庄の進攻作戦に失敗し撤退したのは事実であるが、大捷の内容や、戦果数字の報道に「宣伝」、誇張の部分が多く含まれていることは、郭沫若の回顧録[7]を始め、多くの研究によって指摘された通りである。

方や、日本国内においても、“敵国”側による巧みな宣伝戦の余波を受け、「台児庄の敗北」に対する世間の関心が高まり、特に敗戦後、軍事ジャーナリスト伊藤正徳の瀬谷支隊の台児庄撤退に関する評論を始め[8]、六十年代以降、台児庄の戦いはいくつかの歴史書にも取り上げられた。

中国側の「拡大宣伝」の内容を認めたわけではないが、「日本軍の敗北」という見解が定着し始めた。こうした「台児庄敗北論」に対して、当時、台児庄の戦いに参加した旧軍人グループが立ち上がり、1967年、戦いの当時、歩兵第十聯隊長赤柴八重蔵(1892-1977、敗戦前は陸軍中将)等と、中央公論刊『太平洋戦争』(『日本の歴史』第25巻、1967年)の執筆者、東大教授林茂や、『日中戦争・和平か戦線拡大か』(中央公論社、1967年)を執筆した臼井勝美との間、論争が起こり、旧軍人らの熱弁及び提出した証拠書類の前に、林茂も、臼井勝美も釈明して旧軍人の言い分を取り入れ、妥協に至った[9]。なお、この論争のお陰で、民間に散失し、論争の証拠として提出された二つの重要な史料――『歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報』及び『歩兵第十聯隊戦闘詳報』が防衛庁の戦史室に寄贈され、その後、これらの記録を元に台児庄の戦いの全過程に対する本格的実証研究が始まり、その代表的成果は、『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈2〉』に収録された「台児庄方面の作戦」である[10]。この日本軍記録史料にもとづく研究の出版は、とりわけ関心が高い中国側研究者の目を引き、内容の一部は中国の各種研究書に引用されたほか、これまで「二、三万」人とされてきた「台児庄大捷」における殲敵の数字も、日本側の統計資料によって、11,984人へと縮小し、修正された[11]。

この日本側の実証研究の結果により、「台児庄の戦い」について二つの対立する見解が明らかになった。一、中国軍の反撃による日本軍の「全面敗北論」、「台児庄大捷論」(中国政府、学界)[12]と　二、台児庄からの撤退は、軍上層部の事前命令に従う、沂州〔臨沂〕救援ための「反転」行為で、作戦不利の背景があるが、大敗北に当たらない、という「転進論」(日本の学界)との対立である。なかには、中国軍の大勝利であった説は「荒唐無稽、作為の説」であり「支那軍に包囲されて重大な損害をうけた事実は皆無であった」と極論する旧軍人の経験者もいた[13]。一方、台児庄における日本軍の苦戦、作戦失敗、撤退の事実に対して異議はなく、対立の焦点は撤退、後退の事実ではなく、その撤退の原因、実態にあり、筆者なりに整理すると、以下の三つの点にある。

一、台児庄からの撤退は果たして事前の計画に従う既定の行動なのか。

二、撤退の実態は敵の反撃による潰敗、無秩序の潰退か、それとも計画的、秩序的戦場撤収なのか。

三、撤退後、戦闘力は残されていたか、徐州会戦との因果関係について。

本論は、台児庄の戦いに関する実証研究の一環として、日本軍の撤退の理由と実態を明らかにするものである。前に触れた敗北論争にも使われた瀬谷支隊の二つの歩兵聯隊の戦闘詳報及び、撤退の経緯を克明に記録した「台児荘反転関係電報綴」など第一次史料を利用し、瀬谷支隊と坂本支隊の撤退に至る全過程――各種の命令と両支隊長の反応、思惑、行動――を分析し、その実

図1　台児庄大戦記念館は愛国主義教育の基地、筆者撮影

態を究明することが目的である。

「台児荘反転関係電報綴」は防衛研究所戦史研究センター史料室にある、台児庄からの撤退に関する重要な資料であるが、解読困難なため、これまで有効に活用されなかった。本論はこの25通にのぼる電報原文に対する丹念な解読を中心に、また各聯隊の戦闘詳報を始めその他の史料と照合しながら、作業を進めていきたい。

今年は日本の敗戦、中国の抗日戦争勝利70周年の年にあたり、過去の戦争記録、解釈に関して、大量の史料の存在にも関わらず、うまく利用されずにいた。歴史的因縁、国家間の歴史認識対立の壁に阻まれ、一部の歴史は政治化し、美化され、民族主義、愛国主義の教育宣伝に利用される現象が続いている。この節目の年に、歴史の懸案を掘り起こして史料によって明らかにすることは、事実を後世に伝える、歴史研究者が負うべき責務ではないかと思う。

一、　坂本支隊の台児庄戦闘支援と反転計画

１．台児庄作戦の概要

台児庄はもともと、日本軍の作戦計画（南部山東剿滅作戦）中の主要な目標ではなかった。1938年1月、河北方面より黄河を渡河し山東省に侵入した北支方面軍第二軍（西尾寿造中将、配下第五、第十師団）は、大本営の「戦線不拡大」の命令で、膠済鉄道（済南・青島）沿線、津浦鉄道（天津・南京）の済寧、曲阜、兗州一線で守備態勢に入るが、現地の部隊は「治安維持」を理由に地方掃蕩のエリアを拡大しつつ戦闘を繰り返し、師団、軍の参謀たちも度重なる「意見具申」を通じて大本営参謀本部に南進作戦の許可を求めた。

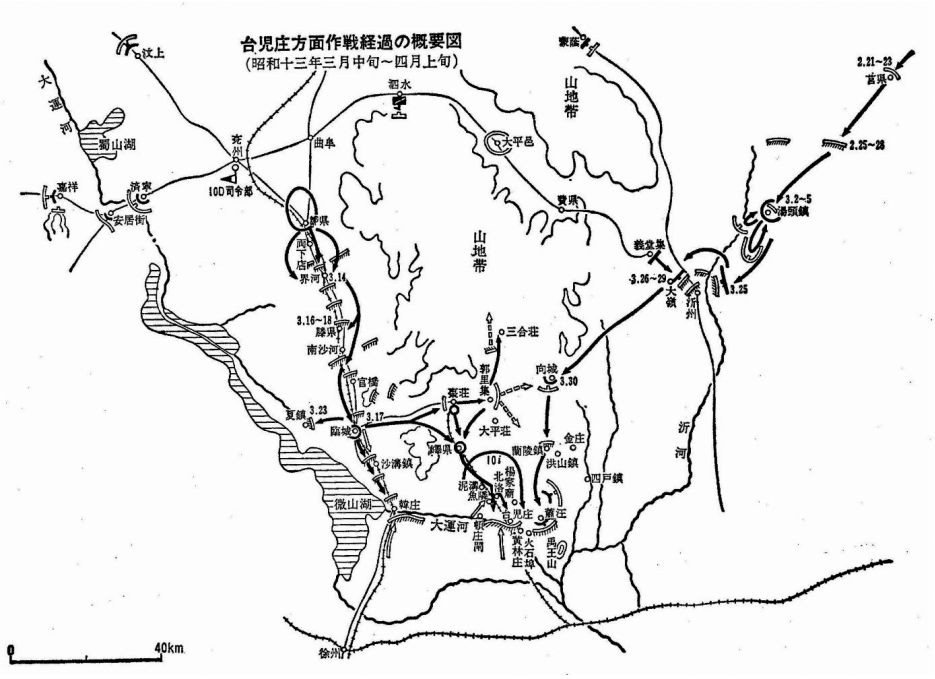

図2　南部山東剿滅作戦全体の要図『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈2〉』30頁より

上海、南京方面の大規模作戦で手が回らない参謀本部は、軍下層部よりの南進の要請を却下し続け、南京方面の戦局が落ち着いてきた3月上旬、ようやく第二軍の南下作戦を認めた。それは「眼前の敵を追い払」う目標と、「深く南進する作戦」をしない約束が伴われた条件付きの許可であった[14]。3月13日、第二軍は南進命令において、第十師団（磯谷廉介中將、1886-1967）に津浦線沿線の界河、滕県、臨城の占領、警備、第五師団（板垣征四郎中將、1885-1948）に沂州、嶧県の占領、警備を指示し、やや南側に位置する韓荘、台児庄の大運河線は、「南部山東剿滅作戦」と命名したこの作戦のボーダーラインであった。

西側の津浦線において、第十師団の瀬谷支隊（瀬谷啓少將1889-1954）[15]は3月14日南下作戦を開始し、初日で中国軍（四川軍）の界河陣地を突破して東側から要塞都市滕県に接近し、その後一部をもって滕県を攻めると同時に、主力を目標の臨城（現在薛城、滕県南東35キロ）に差し向けた。滕県を陥落（18日）する前の17日夕方、歩兵第六十三聯隊の快速挺進隊を先頭に一挙に四川軍の司令部所在地臨城を占領した。18日、師団の命令に基づき瀬谷支隊は兵を分け南の運河北岸の韓荘（臨城南25キロ）に一個大隊を派遣し、東の嶧県（臨城東30キロ）に一個大隊の兵を進めた。20日、師団の「韓荘、台児庄運河ノ線ヲ確保シ臨城、嶧県ヲ警備スルト共ニナルヘク多クノ兵力ヲ以テ沂州方面ニ突進シ第五師団ノ戦闘ニ協力」すべきとの命令を受け、支隊本部を含む主力を嶧県に前進させ、先着した左追撃隊を掌握して、台児庄（南東33キロ）及び蘭陵鎮（東28キロ）方向に捜索前進の態勢を整えた[16]。

瀬谷支隊長は、台児庄の運河線を確保するため、22日歩兵一個大隊（歩兵第六十三聯隊第二大隊、安永興八中佐）、聯隊砲約一個中隊、野砲兵一個中隊（10A＝第十砲兵聯隊第二中隊、正中為雄中尉、38式野砲4門）となる「台児庄派遣隊」を組織し、23日台児庄に前進させた[17]。この時中国軍の主力は嶧県東、北の山地に集結しており、沂州方面第五師団の進展もうまく行かなかったため、瀬谷支隊長は11,000余名の兵力を韓荘、臨城、嶧県、棗荘、沂州（沂州支隊、坂本支隊支援のため）の各方向に振り分け、台児庄に派遣した部隊は、合計人員1500余名、馬350匹、改造38式野砲4門の小規模であり[18]、しかも台児庄制圧した後、ただちに嶧県に引き返して郭里集東側地区の敵の撃破に協力する予定を組んでいた[19]。瀬谷支隊長は台児庄の戦いを軽く見ていたようである。

歩兵第六十三聯隊第二大隊（台児庄派遣部隊）による台児庄城の攻撃は、24日夕刻から始まり、第一回の突入は不成功に終わり、大量の敵精鋭部隊が台児庄城内及びその周辺にある事実が判明した。瀬谷は26日午後1755〔17時55分、以下同〕、聯隊長福栄真平大佐（1890-1946）に増援の「台児庄攻略部隊」の編成を命じ、27日朝、嶧県を出発させた[20]。第二梯隊の「台児庄攻略部隊」が到達する前の27日朝、台児庄派遣部隊は弾薬の補充と砲兵の増援を受け再度の攻撃を強行した。この第二回目の攻撃で派遣隊の第二大隊は東北門西の城壁の破壊口から城内に突入成功したが、市街地で中国軍の頑強な抵抗を受け苦戦が続いた。

3月28日、「台児庄攻略部隊」の到達で福栄聯隊長は自ら陣頭で第三回の攻撃を指揮した。27日午後、台児庄攻略部隊の到達により、台児庄周辺の日本軍砲兵部隊は、第二野戦重砲聯隊の4年式15糎榴弾砲12門、野砲兵第十聯隊第一大隊の改造38式野砲（7.5糎）8門に、支那駐屯軍

砲兵の96式15糎榴弾砲2門を併せて20門（歩兵部隊の聯隊砲、大隊砲を除く）となり、他に軽装甲車一中隊（94式軽装甲車17輛）と支那駐屯軍の臨時戦車中隊（89式戦車7輛、軽装甲車5輛）も加わり、戦力が大いに増強された。歩兵も一個大隊から二個大隊に増え、歩兵、砲兵の総勢は前の3倍にあたる5508人に拡大した[21]。

3月28日第三回目の攻撃で、新着した歩兵第六十三聯隊第三大隊（大村省吾中佐）は一旦台児庄の西北角の一角を占領したものの、戦線は膠着し、戦果の拡張は困難であった。嶧県北部山地の戦闘が終息に向かった29日、瀬谷支隊長は「主力ヲ以テ速ヤカニ台児庄附近ノ敵ヲ撃破スヘキ」との師団命令を受け、配下の歩兵第十聯隊と師団砲兵の約二個大隊（砲20門）を台児庄に追加投入し、3月30日夕方、第四回目の攻撃を組織した。攻城部隊の一部はこの猛攻で城内の東部を支配して戦線を南の大運河線までに推進したが、逆に28日占領した西北角の陣地（第三大隊）を守りきれず、敵前の退却が余儀なくされた（4月1日夜）[22]。

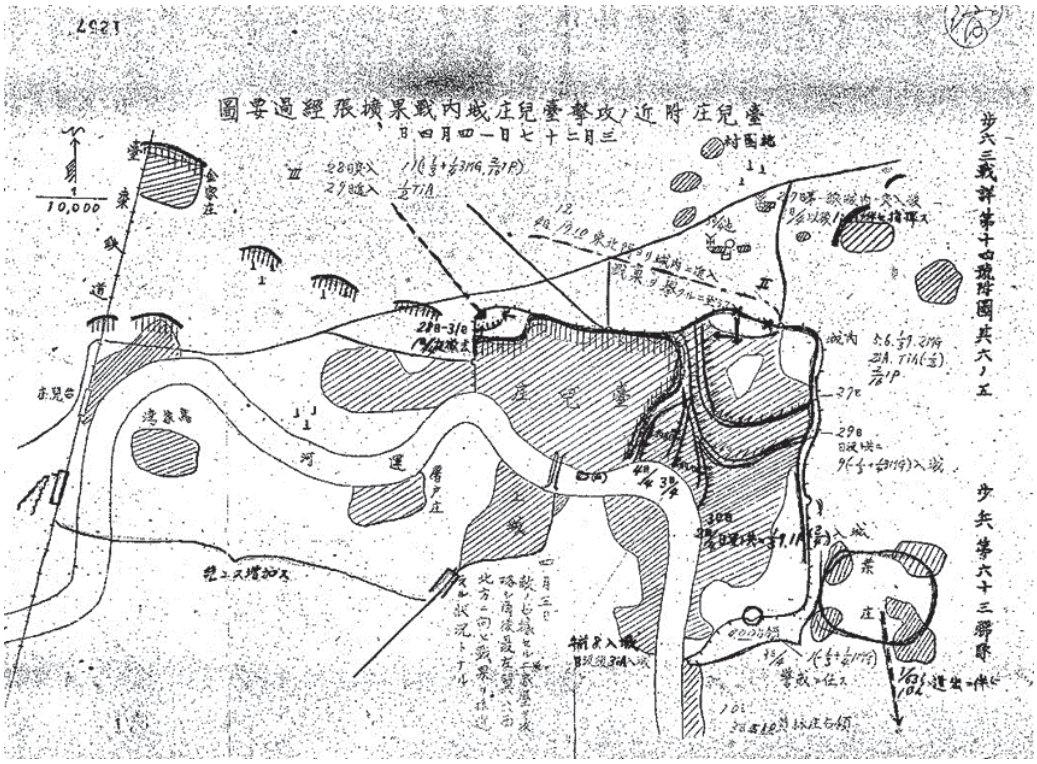

図3　台児庄城内攻撃進展図『歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報』1257頁より

その後、城内の戦線が膠着したまま、激戦の場は城外の砲兵戦、運動戦に移り、4月2日以降新着した火炎放射器も城内の第一線に投入されたが、戦線の進展は僅少であった。4月4日、瀬谷支隊長は「瀬支作命第七十二号」命令を出し、「支隊ハ台児庄ト外部トノ交通ヲ完全ニ遮断シ速ニ之カ掃蕩ヲ完了セントス」と厳命を出し、（第六十三聯隊の）「Ⅲ〔大隊〕ハ薄暮ヲ利用シテ台児庄西北部附近ニ突入シⅡニ協力城内ノ掃蕩ヲ促進スヘシ」[23]と新たな攻撃を部署したが、失敗に終わり、城内の戦線はほとんど推進できなかった[24]。この結果をうけ、瀬谷支隊長はこ

のままでは台児庄の陥落がもはや不可能であることを認識した。4月4日の戦闘を期に、瀬谷支隊長は密かに退き時のタイミングを測り始めたと思われる。

２．第五師団の台児庄救援

一方、東戦線の第五師団坂本支隊（坂本順少將）は、沂州城攻略のため3月25日沂河を渡河し、29日城壁西側で攻撃準備をしている時、台児庄方面の瀬谷支隊救援命令が出されたため、現地に監視の部隊を残して「主力ヲ以テ同夜十一時出発台児庄方面ニ向ヒ急進シ三十一日向城愛田間ノ地区ニ進出」した[25]。

歩兵第二十一聯隊の戦闘詳報によると、転進命令が伝達されたのは3月29日2200（22時、以下同）で、「支隊主力ハ向城ニ向ヒ転進シ台児庄附近ニ交戦中ノ瀬谷支隊正面ノ敵ヲ背後ヨリ之ヲ攻撃スヘキ」趣旨である。片野（定見）部隊長（歩兵第二十一聯隊長）は「沂州城ハ眼前ニアリ敵ノ戦意大ナルモノナシ　一挙ニ之ヲ奪取シタル後向城ニ転進スルハ将来ノ作戦上有利ニシテ兵及敵ノ士気ニ及ホス影響モ又大ナル旨」の意見を具申し沂州の攻撃継続を師団に訴えたが認められず、部隊は直に攻撃を中止し、29日夜暗、弾薬補充を受けて出発した[26]。片野部隊を右縦隊として向城から蘭陵鎮（台児庄北東25キロ）の路線をとり、長野（祐一郎）部隊（歩兵第十一聯隊）を左縦隊として洪山鎮経由でそれぞれ台児庄の方向を目指した。向城に到着した片野部隊は、第一大隊を向城守備隊として残して31日朝出発し、続いて後続の長野部隊も九時半、向城を通過し蘭陵鎮に迫った。蘭陵手前の林屯附近で、歩兵第十一聯隊はいきなり敵の大軍と遭遇して激戦となり、第一の大隊長沖少佐が負傷し、高地占領の部隊も、敵砲兵の集中火を浴びて死傷者が続出した。砲撃と同時に「雲霞の如き敵の大軍」に逆襲され[27]、そのため長野部隊は日没まで現地に足が止められた。この遭遇戦は、坂本支隊の台児庄戦場における苦戦の始まりである。

坂本支隊の兵力は、3月17日基点で「歩兵約六大隊、野砲兵約二大隊、山砲兵一中隊基幹」だったが、「沂州を監視の為竝向城に各一部の兵力を残置」したため、台児庄支援部隊の兵力は「歩兵約四大隊、砲兵二大隊」の構成（約6-7000人と推定）であり[28]、戦車、軽装甲車、野戦重砲兵などの配属部隊を擁する瀬谷支隊より戦闘力は薄弱であった。一方、両支隊合わせても二万人弱の日本軍に対して、中国軍の主力部隊が次々台児庄附近に集まり、その数は4月6日の時点で隣接する地区の兵力だけで「十箇師ノ優勢ナル兵団」（約十数万人）であった[29]。

坂本支隊は「四月一日午前八時十分蘭陵鎮北方一粁ノ線ニ達シ」蘭陵鎮攻撃を開始し、正午、瀬谷支隊は軽装甲車の斥候を以て坂本支隊と連絡をとれた。4月2日、坂本支隊は更に南進して、先頭は台児庄東々北方向の季村（約10キロ）に到達し、司令部はその北方の翟庄に設営した[30]。この場所は、瀬谷支隊とわずか10キロ離れた台児庄の東方向にあるが、両支隊の間に、中国軍の大部隊が進出していた。

中平偵察部隊（88式偵察機中隊）の報告では、この頃、6、7キロ先の運河南岸の禹王山、胡山、黄石山の高地に「相当数の敵」が観察され、東方四戸鎮一帯にも大量の敵が集結していた。また南方数キロ先で、後保（台児庄東方七粁）、東黄石村（後保東々南五粁）にも敵少なくとも5000人が大王廟（台児庄南南東十六粁運河々畔）に向かって「退却」している、という[31]。

4月1日正午、第二軍参謀長は、中平中隊の偵察機を使って坂本支隊に通信筒を投下し、台児庄戦場における作戦方針を指示した。

> 敵ノ主力蘭陵鎮南方地区ヲ退却中ナル現況ニ鑑ミ　蘭陵鎮附近ニ膠着スル事ナク一刻モ速ニ蘭陵鎮東南方地区ヨリ遠ク南方ニ急進シ　敵ノ退路ヲ遮断シテ殊更ニ光彩ヲ添エラレン事熱望堪エス[32]

ここで、坂本支隊に与えられた任務は台児庄攻撃の参加ではなく、台児庄の東側から回り込み、敵の後退路を切断することであった。後方から中国軍の補給線を切断すると、台児庄内の抵抗は簡単に崩壊するだろうと、第二軍の作戦参謀たちが楽天に考えていたようである。

敵の実力を軽く見積もった第二軍の参謀部は、坂本支隊がまだ本格的な戦闘を始める前から早々と坂本支隊の「沂州反転」計画を練り始め、4月2日1055、第二軍参謀長より第五師団参謀長宛の電報において、

> 軍ハ「坂本支隊カ依然瀬谷支隊ト相協力シ台児庄及其東南方運河ノ線並禹王山付近ヲ占領シタル後　当時ノ状況ニ応シ沂州攻略又ハ台児庄→沂州道方面一帯ノ残敵掃蕩ヲ行ウ」如ク該支隊ノ戦闘ヲ指導セラルルヲ適当トスル意見ナリ

と、軍の反転作戦の意見を第五師団に示した[33]。反転の具体的タイミングは、「当時ノ状況ニ応シ」るという電文から分かるように、現地の坂本支隊長に適宜の判断を委せているようだった。

攻撃態勢を整えた坂本支隊は、予定の通り敵後方への攻撃を始め、3日「午前八時頃胡山附近ノ敵陣地攻撃中ニシテ司令部ハ萧〔蒲〕汪ニ在リ」（台児庄東10粁）とあるが、4日、坂本支隊は依然「片野部隊〔歩第二十一聯隊〕ヲ以テ胡山ヲ攻撃中ニシテ、長野部隊〔歩第十一聯隊〕ハ古梁王城ヲ攻撃中」[34]で、戦線をほとんど推進しなかった。坂本支隊も敵の防御線を突破できず、戦局が意の如く進展できなかった様子が窺える。以上は偵察機の報告であるが、実際の戦線はそこまで行かなかったようである。『歩兵第十一聯隊史』の記録によると、片野部隊は4月2日「萧汪西南の辛庄〔二キロ〕、三日には火石埠」に進出し、報告された運河南岸の古梁王城より、四キロ以上離れた場所にあった。長野部隊も胡山で戦ったのではなく、むしろ萧汪東北二キロの賀庄（現在西馬店村、第十一聯隊本部）は激戦地であった。長野部隊はここで包囲され、7日撤退するまでほとんど一歩も動けなかったのである[35]。「火石埠は台児荘の東南東わずかに五キロ、あと一歩進撃すれば台児荘東方に在った福栄部隊と連絡できる距離であったが、大河の如く戦場を埋め尽くす敵大軍の波に寄せられてこれに抗し難く、結局本隊の位置に後退せざるを得なかった」と、『歩兵第十一聯隊史』は攻撃の様子を記す[36]。

攻撃の不如意だけではない。敵は次第に兵力を増加して坂本支隊を包囲して来た。4日夕方、中国軍第一三九師は「大王廟（台児庄東南方約十五粁）附近ヨリ渡河北上シ郁庄（胡山北八粁）黄

湖（郁庄西南二粁）附近ニ進出」し、これに対して坂本支隊は「歩二大野砲一大ヲ以テ溝徐（胡山北方十粁）附近ヨリ之ヲ攻撃」した[37]。地図を確認すると、中国軍は南から北上し、南、東、北の三面で坂本支隊を包囲していた様子が分かる。

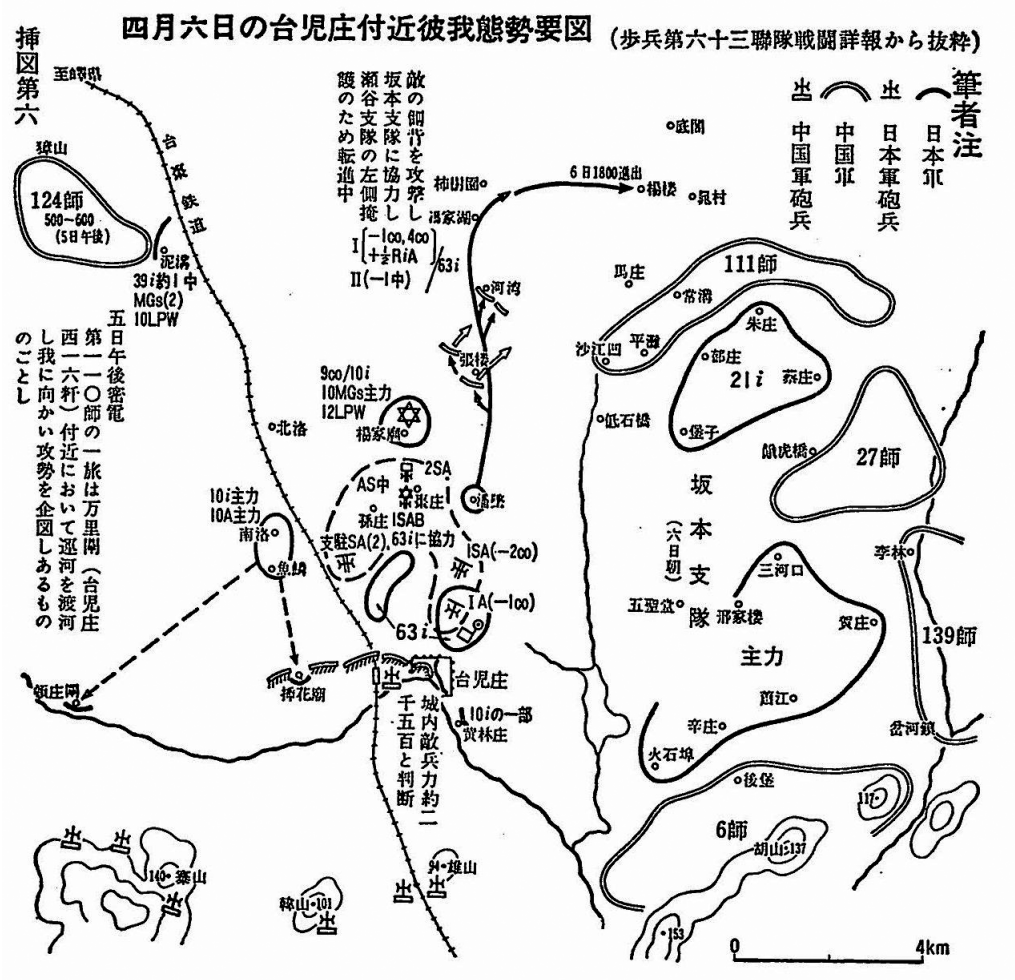

図4　四月六日の態勢要図、右は坂本支隊、左は瀬谷支隊『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈2〉』39頁より

第十一聯隊はこの数日、攻撃の進展はなく、本部所在の賀庄が包囲され陣地を守るだけで精一杯だった。逆襲する「敵は部落の土壁の破壊口から進入して来て四方から火を放った。狭い部落の露地のために我が軍の連絡、指揮は混乱し陣地は各所で破られ、一部の民家は敵に占領され残敵を掃蕩することが出来なかった」[38]。

二、　反転命令下達と「一撃」作戦

前線における瀬谷、坂本両支隊の苦戦をまるで知らないかのように、4月5日、1400、第五師団長から坂本支隊長宛「板参甲第二〇七号」命令が下達された。

三月三十日来　支隊ハ神速果敢ナル作戦ニ依リ　第十師団ノ作戦ヲ容易ナラシメ　甚大ナル効果ヲ収メタル功績ニ対シ祝意ヲ表ス　支隊ハ速ニ当面ノ敵ヲ撃滅シタル後　反転シテ残敵ヲ掃蕩シツツ沂州攻撃ノ為先ツ朱陳ニ向ヒ前進スベシ　朱陳到着ト共ニ鈴木　中村両部隊ヲ貴官指揮下ニ復帰セシム[39]

これすなわち、坂本支隊の「反転」を指示した師団命令で、瀬谷支隊の台児庄撤退の30時間前、坂本支隊の「反転」の54時間前に下達したものであった。反転命令を下達した約二時間後、1620、第五師団参謀長は「板参乙第三三七号」電報でこの反転命令の内容を上級の第二軍にも知らせた。

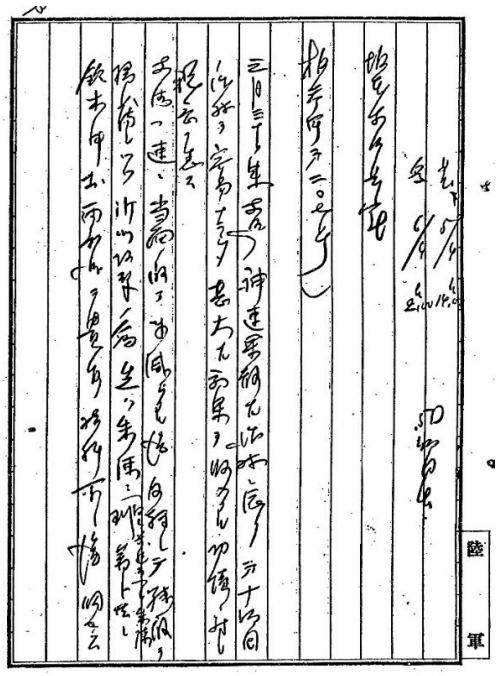

図5　最初の反転（撤退）命令は4月5日
「台児荘反転関係電報綴」No.256

坂本支隊ハ速ニ当面ノ敵ヲ撃滅シタル後ニ反転シ途中残敵ヲ掃蕩シツツ沂州攻略ノ為ニ向城ヲ経テ先ツ朱陳ニ向ヒ前進セシム[40]。

なぜ「沂州反転」が急がれたか、背景には坂本支隊の後方事情の緊迫さがあった。先述したように、坂本支隊は台児庄に前進した際、途中の向城鎮に一個大隊の守備隊を残したが、これは、後方との補給線を確保するための布石であった。まもなく敵部隊は坂本支隊の後方に進出し、4月2日、第五騎兵聯隊主力約500名は向城南々東10キロの金庄で敵2000名に包囲され、死傷続出し瀬谷支隊に緊急出動を要請する事態となった[41]。瀬谷支隊は歩兵一個中隊と軽装甲車中隊を中心となる向城救援隊を組織するが[42]、出発を待たずに向城守備隊（歩兵第二十一聯隊第一大隊）の救援で、脱出が成功し、70名の重傷者を後送して向城に帰還した。ところが、4日、向城も「有力ナル」敵によって完全包囲される事態になり、外部との交通は完全に遮断された[43]。とうとう、4月6日、向城守備隊は弾薬と食料が底をつき、「戦闘機掩護ノ下ニ輸送機四ヲ以テ弾薬衛生材料ヲ空輸投下セリ」という深刻な危機にまで発展した[44]。4月5日、坂本支隊に対する沂州反転の命令には、帰途においてこの危機を救援する師団の意図があったと考えられる[45]。

注目すべきは、師団は「反転」だけを命じたが、反転開始の時間を指定しておらず、そのかわり「速に当面の敵を撃滅したる後」という曖昧な時間条件をつけた。「敵の撃滅」は反転の大前提となり、実際反転開始のタイミングは、坂本支隊長に判断を委ねたようである。

坂本支隊長は一体どのように反転を部署するか、命令を出して1時間45分後、1545、第五師団参謀長から坂本支隊長宛に「板参甲第二〇八号」を送信し、「坂本支隊ノ現在地ヨリ沂州方面

へ反転ノ時機及2SA　LPWS掌握ノ時機即刻報告セラレタシ」と問合せの電報が届き[46]、坂本順少将は2040、師団参謀長宛「板参甲第二〇八号返」を送り、次のように報告した。

一、沂州ヘノ反転ハ当面敵ノ撃滅シ　八日頃出発

二、SA　LPWノ掌握ハ本夜瀬谷支隊ニ連絡セルモ返ナシ　六日掌握ノ見込

と[47]。

2SAとは台児庄攻略のため瀬谷支隊に配属された第二野戦重砲聯隊の軍隊符号で（一大隊欠、四年式15糎榴弾砲12門）、LPWは軽装甲車の軍隊符号で同じく瀬谷支隊の台児庄攻略のため配属された独立軽装甲車第十二中隊〔94式軽装甲車17輌〕を指す[48]。瀬谷支隊には独立軽装甲車第十（27日台児庄入り）と第十二（30日台児庄入り）の二中隊が配属されているが、配属転換に命ぜられたのは、第十二中隊であった。配属転換は、命令系統から見れば、第二軍によるものであり、意図は、その後行われる沂州攻撃のための戦力補強であろう。

坂本支隊長は「沂州反転」命令を受けたあと、すぐ行動案を作成し、2137、「坂作報第二四二号」を以て、まず歩兵第二十一聯隊長（片野部隊）に次の内容を打電した。

一、支隊ハ沂州ノ反転ヲ命セラル

二、支隊ト明六日日没ヨリ行動ヲ開始シ低石橋附近ヲ渡河シ潘墜、楊家廟ヲ経テ三仏楼附近ニ兵力ヲ集結シ爾後沂州ニ反転ス

三、片の部隊ハ反転準備ヲナス可シ細部ハ命令受取者ニ下達ス（後略）[49]

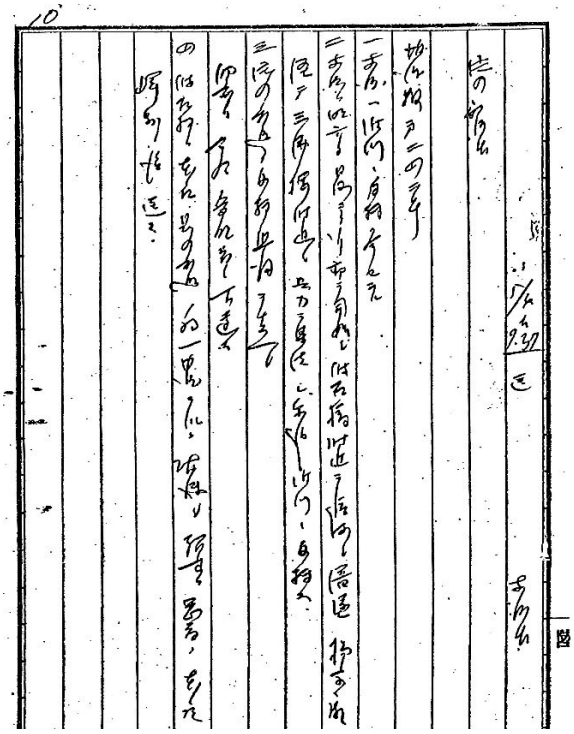

図6　坂本支隊長の反転部署
「台児荘反転関係電報綴」No.256

4月5日夕方から、坂本支隊が反転を着々と準備していた様子が窺える。「北支方面作戦記録」によると、坂本支隊長は反転命令に接した時点で「瀬谷支隊の台児荘攻略は既に完了しあるものと判断し瀬谷支隊に策応すべき任務は既に之を達成せり」と思い、反転を部署したというが[50]、当時両軍間の距離と通信状況を見れば、このような誤解はありえないと思われる。つまり、瀬谷支隊の苦戦を知ったうえでの命令服従だったのであろう。

いったい、坂本支隊長はいつ頃、反転の計画と準備状況を瀬谷支隊に知らせたか？この電報

綴全体の内容を見れば、2030発信の「坂作報第二四四号」となるが、前述のようにその前瀬谷支隊長に「2SA　LPWS掌握ノ時機」の問い合わせがあったので、2040、師団参謀長宛「板参甲第二〇八号返」の前に、瀬谷支隊との連絡があったはずである（但し電文は残されていない）。

その後、2030坂本支隊長は反転準備の状況を「坂作報第二四四号」電報をもって瀬谷支隊長に知らせた。

一、支隊ハ沂州攻略ノ為反転ヲ命セラレ明日六日日没後行動ヲ開始シ七日払暁迄三佛楼附近ニ兵力ヲ集結ノ預定
二、LPW及SA2ハ　七日朝ニ楊家廟ニテ掌握シ得ル如ク手配乞ウ
三、明六日連絡者ヲ貴司令部ニ派遣ス[51]。

坂本支隊に「反転命令」の下達と重武器の配属転換の命令は、瀬谷支隊長に大きなショックを与えたに違いない。苦戦中の瀬谷支隊にとって、友軍による敵の牽制も、野戦重砲兵及び軽装甲車部隊も欠いてはならない大事な戦力であり、戦いの成果が実らないうちこれらを引き上げてしまう決定は、言語道断である。坂本支隊に引き渡しの返事を怠ったのも、前線の状況ですぐ手放せないか、無言の抗議の現れかもしれない。この第二軍参謀部の決定に対する怒りと不満は、翌日瀬谷支隊長の無断撤退の決断にも影響したと思われる。

2030発「坂作報第二四四号」において、坂本支隊長は瀬谷支隊に反転開始の計画を伝え、その前提である「当面の敵を撃滅」する作戦計画を知らせなかったが、約一時間のあとの2135、「坂作報第二四五号」を打電し、敵を「一撃」する作戦部署を照会した。

一、敵ハ逐次兵力ヲ支隊ノ後方タル老宅、朱庄、丁灘、常溝、沙江凹、尋家庄附近ニ迂回シ其兵力少クモ一師（一一一師）ナリ
二、支隊ハ沂州ノ反転ヲ命セラレタルモ敵ニ一撃ヲ與ヘタシ
三、瀬谷支隊ハ楊家廟東北側方向ヨリ敵ノ包囲翼ノ背後ニ一撃ヲ与エラレタシ　我支隊モ之ニ連繋シ敵ニ猛攻ヲ加ヘ一致協力之ヲ殲滅セントス　右ニ関シ返ヲ乞フ[52]

この「沂州反転」前、敵に「一撃」を与える作戦計画は、もちろん、師団の命令に従うものであるが、作戦場所を支隊後方の楊家廟東北（底閣・楊楼）を選んだ理由は、支隊左側背後で包囲をなした敵の包囲線を撃破し、自らの反転進路を確保する目的も窺われる。楊家廟は瀬谷支隊の本部であり、この附近で共同作戦を行うメリットは、配属転換部隊の掌握を容易にし、同時に友軍の動揺を防ぐ意図も考えられよう。坂本支隊長も瀬谷啓の口に出せない苦衷を察したに違いない。

以上は4月5日午後、坂本支隊長は沂州反転命令を受けてから夜までの部署の概要である。わかりやすく整理すると、坂本支隊の沂州反転は次のような段取りとなっている。

１．支隊は片野部隊（第二十一聯隊）をもって現地で撤退を掩護し、支隊主力（第十一聯隊、支隊本部）は4月6日日没後行動を開始し、7日払暁まで瀬谷支隊の後方に当たる三佛（付）楼附

近に集結させ、ここで、配属転換予定の軽装甲車中隊と野戦重砲第二聯隊を預かる。

２．瀬谷支隊と協力して、4月７日に予定した敵の「一撃」作戦を展開し、敵の包囲を撃破してから、8日全支隊を挙げて沂州反転を開始する、という。

なお、転進命令が下達された4月5日1500、坂本支隊の位置は、南線では「歩一一ハ火石埠（台児庄東方六粁）、五聖堂（火石埠北方四粁）付近ニ」、北線「歩二一ハ崔家圩（五聖堂北方三粁）、堡子、郁庄附近」にあり[53]、翌4月6日の「台児庄附近彼我態勢要図」で確認すると、南面から敵六師、東面に敵三九師、北面敵一一一師に三面包囲され（西は湿地）、歩第十一、歩第二十一両聯隊の真ん中にも敵二七師が楔のように押し込まれていた[54]。坂本支隊も絶体絶命の危険にさらされていたことが分かる。この包囲網の中で、6日夜予定する坂本支隊の反転ルートは、瀬谷支隊と湿地を隔て背中合わせの北西方に設定した。掩護のため歩第二十一聯隊を残して主力は低石橋附近を渡河して瀬谷支隊の戦闘地域に入り、潘墜〔壟〕→楊家廟（瀬谷支隊本部）→三仏〔付〕楼附近に後退して瀬谷支隊と合流する予定になっていた。

三、瀬谷支隊長の対応

坂本支隊の「沂州反転」計画及び一部配属部隊の配属転換を知らされた瀬谷支隊長は、ショックを受けるが、同時に心機一転、これを自ら戦場脱出の好チャンスだと捉えた。8メートル幅の水濠、12メートル高の城壁を持つ要塞滕県城でさえ、たったの一個聯隊をもって二日ほどで陥落させた彼の強悍な部隊にとってしても、この2メートルもない低い壁に囲まれた台児庄[55]の攻略は、あまりにも困難であった。3月24日からの初陣からこれまで丸13日間がかかり、大規模な攻撃は五回、兵力も二個聯隊の歩兵をはじめ、各種火砲、戦車、装甲車、火炎放射器などありだけの武器すべてを投入した。壮絶な苦戦で、前線部隊の犠牲が増え続け、得られたのは廃墟化した半分強の市街地のみで、敵の陣地は依然として日本軍の攻撃のまえに頑強に立ちはだかっていた。

4月4日瀬谷が組織した大規模攻撃が不発に終わった後、瀬谷支隊長はもはや戦意がなかったと考えられる。この攻撃において注目すべき二つの事件があった。一は城の西北角の再攻撃を命じられた歩兵第六十三聯隊第三大隊は、前回の失敗、撤収（4月1日夜）でこの地の再攻撃にトラウマになったようで、命じられても西北角からの突撃を実行しなかった。「熟考ノ結果」西北部突入の命令を、すでに確保した東北門から進入の再部署に変更し、城内で西方（敵の後方）に迂回攻撃の代替戦術をとられた。しかし、「（第三大隊）第一二中隊ハ薄暮行動ヲ起シ砲兵ノ効果ヲ利用シ午後七時十分東北門ヨリ城内ニ進入シ第二大隊〔城内部隊〕ノ最右翼方面ニ突入西方ニ向ヒ戦果ノ拡張ニ努メタルモ中隊長以下多ク負傷シ大ナル戦果ヲ確得スルニ至ラス掃蕩ヲ中絶ス」[56]と、不発に終わった。この部下がとった消極な戦法とその失敗をみて、瀬谷は前線部隊の戦意はもはや尽き果てていたことを実感したに違いない。

もう一つは、攻撃に伴う友軍砲火による掩護ための近接射撃を自らやめたことである。膠着する局面を打開するため、新式の火炎放射器が前線に届けられたが十分に機能しなかった。この時、前線部隊の攻撃はほとんど「緊密なる歩砲協同戦術」――友軍砲火の近接掩護射撃を利用

し、砲撃の隙間の僅かな時間を利用して突撃する戦法――で行われる。一方、膠着する敵我の陣地の間わずか数十メートルであり、友軍砲火による誤射は度々発生した。4月4日の戦闘で城内第一線の第二大隊長安永興八は「友軍砲弾ニ依ル危害ノ兵員ニ及ホス精神的感作ノ大ナルヲ思ヒ砲兵ノ敵前線ニ近キ射撃ヲ希望セス」と福栄聯隊長に「具申」し、受け入れられた[57]。この掩護近射中止の決断は、攻撃部隊にとって最後の有効な突撃手段をみずから放棄することを意味した。

この日の失敗をきっかけに、瀬谷支隊長は自分の部隊は最早この攻撃が完遂できないことを悟り、無駄な犠牲を避けるため、この悪夢の地から抜け出す方法を考え始めたと思われる。一方師団側からも、軍側からも台児庄の即時陥落を強く求められ、「皇軍」の名誉と伝統からも、自らこのような卑怯と思わせる敵前の撤退要請を出すわけには行かなかった。瀬谷は後方軍、師団の進攻命令と前線部隊の消耗、戦意喪失の板挟みになって苦しんでいた。

この時、飛び込んだのは5日午後、坂本支隊からの「沂州転進」の連絡である。危機の中友軍と武器を引き上げる命令は、かろうじて維持できた敵我対峙の情勢を逆転させ、台児庄攻略戦の敗北を意味するだけではなく、場合によって自らの部隊が優勢の敵に包囲され全滅に追いやられる危険さえある。坂本支隊の沂州反転の機会を利用して、本支隊もこの台児庄の煩雑から抜け出そうではないかと、瀬谷は考えはじめた。まもなく、坂本支隊長から、反転前の「一撃」作戦への協力が要請され、瀬谷はこれに飛びつき、合同「一撃作戦」の口実で支隊全体を台児庄から撤収する計画を五日夜、徹夜で練り上げた。「坂本支隊ノ状況ニ鑑ミ一時台児庄ノ攻撃ヲ中止シ主力ヲ以テ坂本支隊当面ノ敵ノ右翼ヲ攻撃之ヲ撃滅スルニ決シ」という口実であった[58]。

のち、この攻撃に使用された兵力は支隊の三分の一しかない事実を見れば、「主力ヲ以テ」救援するのは口実だったことが分かる。もちろん、実際の撤退行為であるため、瀬谷支隊長はこの行動計画を師団にも軍にも、そして坂本支隊にも秘密にしていた。その準備の様子を見よう。

6日払暁0300、瀬谷は歩兵第六十三聯隊に「作命二七八号」を伝え、第一大隊（中川廉少佐）は一部を台児庄東南端の警戒に残して、主力を北方の潘墜〔壟〕に集結するよう命じ、0700、「歩六三ノ第一大隊ハ払暁迄ニ潘墜ニ集結後河湾ヲ経テ馬庄方向ニ敵ヲ攻撃平灘→常溝ノ線ニ進出シ坂本支隊ニ協力スルト共ニ支隊ノ左側ヲ掩護スヘシ」と前進命令を下した[59]。

これは、台児庄の東部の攻撃部隊を撤収し、後方北東に迂回して坂本支隊を包囲する敵を背後から攻撃するための準備である。7日に予定した「一撃」作戦はまだ照会、計画の段階であり、待ちかねた瀬谷支隊長は先んじて自らの協力行動を起こしたのである。

部署を終わった4月6日0855、瀬谷は坂本に「瀬谷第九十三号」を打電した。

一、貴支隊ノ背後ノ迂回シタル朱庄　老宅　常溝ノ敵ヘ我支隊一撃　午前七時ヨリスル
二、貴支隊ノ沂州方面ヘノ転進時機ハ当支隊ト密ナル関係アルヲ以テ〔中略〕如何ナル時機ニ転進ヲ開始セラレル預定ナリヤ至急承知致度
三、Ⅱ/2SAハ本日午後ニ貴支隊ニ転属セラル預定…[60]

この電報内容を見れば、瀬谷支隊長は、6日午前0855の時点で、まだ、坂本支隊は7日に一撃作戦を行い、8日に反転出発の新予定を知らなかったようである。

一方、坂本支隊の場合、当初「反転」開始予定の4月6日において、朝から苦戦が続いた。0910、坂本支隊長より瀬谷支隊長宛「坂報電第一一一号」において

> 貴隊ノ戦況ニ鑑ミ支隊ハ添書現在地ニ於テ攻撃ヲ続行スルニ付七日楊家廟ニ於テSAⅡ掌握ノ件取消ス12LPWSハ速ニ五聖堂ニ急進セシメラレ度

と、計画の変更を知らせてきた[61]。反転延期の理由は次節に触れるが、この電文は支隊主力を7日払暁まで三仏〔付〕楼に集結する元計画の撤回し、現地を堅守する決定を知らせたものであり、配属転換となる軽装甲車第十二中隊を「速に五聖堂に急進せしめられ度」要請から、前線の緊迫した様子も伝わってくる。沂州反転どころか、いま坂本支隊は包囲され戦場の脱出でさえ、ままならない状態だったようである。

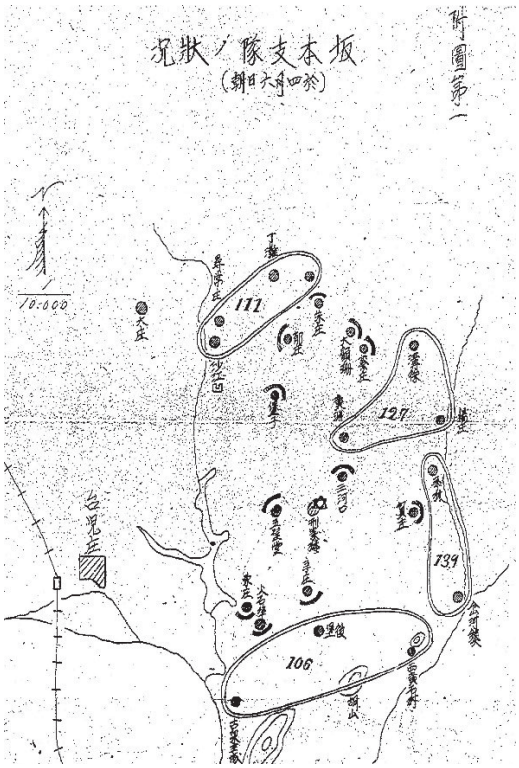

図7　坂本支隊を包囲する中国軍
『歩兵第十聯隊戦闘詳報』1843頁より

一方、坂本支隊より兵力、弾薬の余裕がある瀬谷支隊の方は、この間、城内の攻撃を実質上停止し、隠密里に部隊の撤退計画を進めた。

4月6日0700、瀬谷支隊長の「瀬支作命七十七号」では、一、歩第十聯隊を退路に当たる南洛（台児庄北西8キロ）、魚鱗〔于里〕に集結させ、西方からの敵の脅威に備える態勢をとらせ、二、6日到達した歩第兵第三十九聯隊第一大隊に泥溝西側高地及び獐山附近の占領を命じた[62]。これは、支隊撤退の道と撤退の目的地泥溝鎮周辺の安全を確保するための布石であった。

計画の内容は、支隊主力（歩十、本部、砲兵諸部隊、歩六十三第二大隊）を南洛、泥溝、臨城の方向に撤

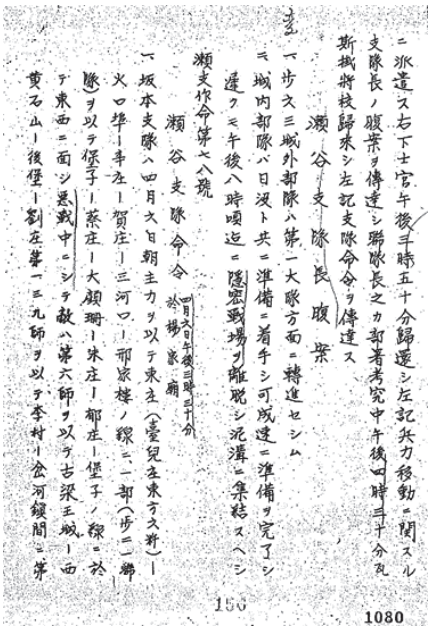
ニ派遣ス右下士官午後手時五十分歸還シ左記兵力移動ニ関スル
支隊長ノ腹案ヲ傳達シ聯隊長之カ部署考究中午後四時三十分頃
斯様將校歸來シ左記支隊命令ヲ傳達ス
瀬谷支隊長　腹案
一、歩ス三城外部隊ハ第一大隊方面ニ轉進セシム
ニ城内部隊ハ日没ト共ニ準備ニ着手シ可成速ニ準備ヲ完了シ
遅クモ午後八時頃迄ニ隠密戰場ヲ離脱シ泥溝ニ集結スヘシ
瀬支作命第七八號
瀬谷支隊命令　於楊家廟　四月六日午後三時三十分
一、坂本支隊ハ四月六日朝主力ヲ以テ東北（臺兒庄東方又斜）ノ
火口埠ノ手左ノ賀庄ノ三河口ノ邢家樓ノ線ニ一部（歩ニ）鄭
隊ヲ以テ保子ノ茶庄ノ大顔珊ノ朱庄ノ郁庄ノ堡子ノ線ニ於
テ東西ニ面シ思戦中ニシテ敵ハ第六師ヲ以テ古梁王城ノ西
黄石山ノ後堡ノ劉庄等ノ三九師ヲ以テ李村ノ会河線間ニ第
150
1080

図8　瀬谷支隊台児庄撤退の命令
『歩兵第六十三聯隊台児庄攻略戦闘詳報』1080頁より

退させるとともに、有力の一部（歩六十三第一、第三大隊）を台児庄の北東方向に迂回させ、坂本支隊の左側背後にある敵（第百一師）の包囲翼を「一撃」する、という戦闘部署である。一撃作戦は、坂本支隊の救援だけではなく、同時に瀬谷支隊自身の東側の安全を確保する意味もあったように考えられる。

撤退命令は6日1530、連絡将校派遣による命令受領の形で秘密裏に下達され、ほぼ一時間後、各作戦部隊の責任者に伝達された。わずか数時間の忙しい隠蔽準備のあと、日没後8時、瀬谷支隊の撤退は一斉に開始された。注目すべきは、この撤退計画は、部隊の行動開始まで極秘にし、坂本支隊長にも通知しなかったことである。

注

1．社論「慶祝台児荘勝利」《新華日報》1938年4月8日。
2．《香港華宇日報》1938年4月11日、14日（《台児庄会戦・第二次中日戦争各种重要戦役史料彙編》、台北：国史館、中華民国73年7月より）、112頁。
3．記録映画『四万万人民』（The 400 Million History Today Inc.1939、Joris Ivens監督）に台児庄の勝利が紹介され、また、ロバート・キャパは1938年5月23日、米雑誌『ライフ』に台児庄の勝利を宣伝した（李海流《羅伯特特・卡帕和他鏡頭里的台児庄大戦》《文史春秋》中国広西：2013年第6期）。
4．《香港華宇日報》4月14日、前掲《台児庄会戦・第二次中日戦争各种重要戦役史料彙編》、122頁。
5．李海流《羅伯特特・卡帕和他鏡頭里的台儿庄大戦》《文史春秋》中国、広西：2013年第六期、38頁。
6．何応欽編著《八年抗戦之経過》台湾：文海出版社、1972年、42頁。
7．郭沫若『抗日戦回想録』（岡崎俊夫訳）中央公論社、1969年、49-52頁。
8．伊藤正徳『軍閥興亡史』3、文藝春秋新社、1958年、78頁。
9．拙論「日本軍の戦史記録と台児庄敗北論」『岡山大学文学部紀要』63号. 2015年7月、参照。
10. 『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈2〉昭和十四年一月まで』防衛庁防衛研修所戦史室著、朝雲新聞社、1975年。執筆者は、防衛庁戦史室の調査員伊藤常男。
11. この数字の由来及び使用側の多くの誤解、間違いについて、拙論《台児庄戦役日軍死傷者数考》《歴史学家茶座》（第三十四辑）済南：山東人民出版社 2014年12月、参照。
12. 中華民国国防部編《抗日戦史》では、第二集団軍（孫連仲将軍）は6日12時総攻撃の命令を出して攻撃開始し、敵はこの攻撃により敗走した、という（前掲《台児庄会戦・第二次中日戦争各种重要戦役史料彙編》、75頁）。韓信夫も《鑒兵台児庄》において、「六日、敵の総崩れを察知した第二集団軍司令長官孫（連仲）は正午十二時総攻撃の命令を下達」し、湯恩伯軍団も午後8～12時、岔路口、劉庄から総攻撃を開始したと書いている。
13. 第六十三聯隊副官（当時）安田享介の言葉。『歩兵第六十三聯隊史』（同刊行委員会、非売品）1974年、434頁。
14. 前掲『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈2〉昭和十四年一月まで』、31頁。
15. 歩兵第33旅団を基幹、配下歩第10聯隊（岡山）、歩第63聯隊（松江）を始め配属砲兵、装甲車、機関銃中隊を含む約12000名の混成部隊。部長は歩兵第33旅団長瀬谷啓少將。
16. 前掲『戦史叢書・支那事変陸軍作戦〈2〉昭和十四年一月まで』、32頁。
17. 『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR（アジア歴史資料センター）JACAR：Ref. C11111252700. №827.（通し番号）（以下では「JACAR：Ref.（番号）と略記」）
18. 算出法は混成第二大隊の数字＋野砲兵数字1/2（一中隊は二日後の追加派遣なので除く）＋無線分隊、衛生兵の数はわからないので、あくまでも概数。JACAR：Ref. C11111253800、画像36/47　№1105）。JACAR：Ref. C11111252700、画像11/55　№827（前掲歩兵第63聯隊　台児庄攻略戦闘詳報）。なお、RIAは聯隊砲（41式山砲）の軍隊符号で、TIAは聯隊速射砲（94式37MM砲）の軍隊符号である。1/2欠は半中隊、二門を意味する。
19. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111252800　№887.
20. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111252800　№903.
21. 算出法は、3月19～4月6日歩兵第六十聯隊参加者6527人の中から、未着の第一大隊、支那駐屯軍90野砲

中隊の数を差し引いた数字。3月28日時点の数字。前掲 Ref. C1111253800.　№1105.

22. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111253600.　№1022.
23. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111253700.　№1062.
24. 以上の戦闘経過は前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』№835-1070を参照。
25. 「第二軍作戦経過概要　自昭和12年9月上旬～至昭和13年7月上旬」JACAR：Ref. C11111441000.　№703.
26. 「歩兵第二十一聯隊戦闘詳報」JACAR：Ref. C11111185900.　№328 №329.
27. 『歩兵第十一聯隊史』鯉十一会編、非売品、1993年、291頁。
28. 「北支方面作戦記録　第1巻2」JACAR：Ref. C11111708200.　№821.
29. 「六日朝十時湯恩伯の電報」『日中戦争』4「岡本清福大佐回想録」（臼井勝美、稲葉正夫編『現代史資料』12、日中戦争4、みすず書房、2004年）521頁。
30. 「第十師団情報記録（磯情第八十～九十九号）」JACAR：Ref. C11111035000.　№1038、№1043.
31. 「第十師団情報記録（磯情第八十～九十九号）」JACAR：Ref. C11111035000. 1044
32. 「第二軍参謀長→坂本支隊長」「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref.C11111465800.　№243.
33. 「第二軍参謀長→第5師団参謀長」前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref.C11111465800.　№245.
34. 前掲「第十師団情報記録（磯情第八十～九十九号）」JACAR：Ref. C11111035000.　№1046、№1050.
35. 「歩兵第十一聯隊第一大隊砲小隊　陣中日誌」JACAR：Ref. C11111179100.　№1530-1541.参照。
36. 前掲『歩兵第十一聯隊史』295頁。
37. 前掲「第十師団情報記録（磯情第八十～九十九号）」JACAR：Ref. C11111035000.　№1055.
38. 前掲『歩兵第十一聯隊史』295頁。
39. 「5D師団長→坂本支隊長宛、板参甲第二〇七号」前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. №256.
40. 「板参乙第三三七号」「5D参謀長→ⅡA参謀長宛」、前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800.　№247.　この電報の受け取りは4月6日となるが、坂本転進の部署を見れば、4月5日の誤りと考えられる。
41. 前掲「第十師団情報記録（磯情第八十～九十九号）」JACAR：Ref. C11111035000.　№1051.
42. 4月2日1540支隊命令、「在向城坂本支隊騎兵隊赴援ノ為歩兵一中隊機関銃一小隊臨時山砲中隊ヲ楊家廟ニ差出シ支隊直轄タラシムヘシ」とある「歩第十聯隊戦闘詳報」第13～14号　JACAR：Ref. C11111171900.　№1747.
43. 『広島師団史』同編纂委員会、1969年、128頁、参照。
44. 前掲「第十師団情報記録（磯情第八十～九十九号）」JACAR：Ref. C11111035000.　№1064.
45. 敵による向城の包囲は結局二週間以上続き、4月14日いったん、歩第41聯隊（第十師団）の救援で糧秣の補給を受け、負傷者246名も収容されたが、16日再び包囲に陥り、19日夕刻、坂本支隊の救援でやっと包囲の敵が撤退した（前掲『歩兵第十一聯隊史』300頁）。
46. この電報の送受時間も誤りがあったようで（「発4/4前11:35　受4/5后15:45」）電報編号「板参甲第二〇八号」の順で、整理しなおした。内容から見ても、4月5日1400発の「板参甲第二〇七号」の後に出した電報であることが確認できる。4月5日1545発ではないかと考えられる。前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800.　№251.
47. 「坂参甲第二〇八号返」「支隊長→師団参謀長宛」前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. №255.
48. 野戦重砲聯隊及び独立軽装甲車中隊装備の仔細について「昭和十二年度陸軍動員計画令同細則ノ件」JACAR：Ref. C01007658900.　№443、№470を参照。
49. 「坂作報第二四二号」「支隊長→片ノ部隊長」前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800.　№253.
50. 「北支方面作戦記録　第1巻　2(2)」JACAR（アジア歴史資料センター）Ref. C11111708200.　№822.
51. 「坂作報第二四四号」「支隊長→瀬谷支隊長宛」前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. №252.　なお、「坂作報第二四二号」の発送時間は2137、「坂作報第二四四号」の発送時間は2030と逆である。作成順番の間違いが考えにくいので、発送の順番（時間）を何らの理由で遅らせたと考えられる。
52. 「坂作報第二四五号」「支隊長→瀬谷支隊長宛」前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800.

№254.

53. 「第十師団情報記録（磯情第八十～九十九号）」JACAR：Ref. C11111035000.　№1064.
54. 「歩六三戦詳第十四号附図其七」『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111253800. №1103-1104.
55. 台児庄城壁（煉瓦制）の高さ1.8M、上の幅0.7M、土塁を含む高さは3M。望楼の高さ4.5M、外濠2-3M。前掲『歩兵第六十三聯隊史』、386頁。
56. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111253700.　№1066-1068.
57. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111253700　№1069.
58. 前掲「第十師団情報記録（磯情第八十～九十九号）」JACAR：Ref. C11111035100.　№1068.
59. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111253800　№1077、№1078.
60. 「瀬谷第九十三号」「瀬谷支隊長→坂本支隊長宛」前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. №257.
61. 「坂報電第一一一号」「支隊長→瀬谷支隊長宛」前掲「台児荘反転関係電報綴」JACAR：Ref. C11111465800. №262.
62. 前掲『歩兵第六十三聯隊台児荘攻略戦闘詳報』JACAR：Ref. C11111253800.　№1079. 参照。